ステレオタイプ・エンボディメント理論における理論的補完の試み
—社会的アイデンティティ理論に着目して—

清水 佑輔（東京大学 大学院人文社会系研究科，yuhos1120mizu@gamil.com）
橋本 剛明（東京大学 大学院人文社会系研究科，hshmt@l.u-tokyo.ac.jp）
唐沢 かおり（東京大学 大学院人文社会系研究科，karasawa@l.u-tokyo.ac.jp）

The complementation of the stereotype embodiment theory: Focusing on the social identity theory

Yuho Shimizu (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, Japan)
Takaaki Hashimoto (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, Japan)
Kaori Karasawa (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, Japan)

Abstract

Elderly people are unique among various discriminated social groups (e.g., black, LGBT) because we all, sooner or later, come to be seen with the negative stereotype. People internalize the negative age stereotype (e.g., incompetent, out-of-date) through life, which has undesirable effects on themselves when they get older. We give an overview of the Stereotype Embodiment Theory (SET; Levy, 2009), consisting of four processes: internalization, unconscious operation, salience gain from self-relevance, and utilization of multiple pathways. The SET discusses the process of generating age stereotype through life, internalizing the stereotype, and the impact toward self. The theory helps to explain the process of elderly adults' self-stereotyping but the SET cannot fully explain an empirically known tendency—a mixed finding that elderly people try to separate themselves from other elderly adults while they are also heavily influenced by negative age stereotypes (e.g., showing a decline in the score of memory tasks). To complement the SET, we introduce the Social Identity Theory (SIT; Tajfel, 1981), which is often used to show the process of generating stereotype among various social groups. By attributing the elderly's identity to the younger age group, elderly people aim to detach themselves from other people of about the same age. Meanwhile, they face lots of social requests from other generations (e.g., "Elderly adults should not accumulate wealth, but pass it on to the next generation.") and many opportunities to recognize that they are "the elderly," which force them to attribute their identity to "the elderly group" appropriate for age. This process makes elderly adults to acquire the self-relevance to the negative age stereotype. The SET itself and the complementation of the theory help to discuss how to decrease undesirable effects of self-stereotyping on elderly people. Although there are some unresolved problems, this study provides a guideline for the literature.

Key words

stereotype embodiment theory, age stereotype, elderly people, social identity theory, internalization

1. 序論

現代の日本において、高齢化が著しく進行している。2018 年の日本の総人口に占める 65 歳以上の割合は 28.7 % と報告されており（総務省，2020）、この割合はさらに高まると予測されている。このような高齢化を受け、高齢者とそれ以外の世代の人々が互いに暮らしやすく、良い相互作用を生み出せるような社会が求められている。しかし、高齢者に対する否定的なステレオタイプが依然として存在する（原田・杉澤・杉原・山田・柴田，2004）。例えば、高齢者は無能である、時代遅れである（Kite, Stockdale, Whitley, & Johnson, 2005）、のろまである（Branaghan & Gray, 2010）といったものである。これらの否定的な認知は、被ステレオタイプ対象である高齢者に対して様々な悪影響を及ぼす。例えば、仕事に対する満足度および意欲の低下（Macdonald & Levy, 2016）のような心理的影響や、能力を発揮する機会の剥奪（朴，2018）、高齢者の意思の軽視や疎外（Vitman, Iecovich, & Alfasi, 2014）、および高齢者虐待の増加（Butler, 1969）といった直接的な差別行動につながることが知られている。また、世代間の調和がとれた社会の形成が阻害される（石井・田戸岡，2015）といった社会的な悪影響も存在する。

一方で、高齢者という社会集団は、黒人や LGBT といった、他の被ステレオタイプ集団とは決定的に異なる特徴を持つ。それは、どんな人間も一定以上長生きすれば必ず高齢者になり、被ステレオタイプ集団の一員になるという点である。よって、上述のような高齢者に対する否定的なステレオタイプが、人々に内面化され、自己に対して適用される過程にも目を向ける必要があると考えられる。

そこで本論文では、Levy（2009）のステレオタイプ・エンボディメント理論（Stereotype Embodiment Theory; SET）に着目する。SET は、高齢者ステレオタイプが生涯を通して内面化され、無意識下で活性化し、加齢に伴って自己との関連性を獲得して、多様な側面で自己に影響を与えるという理論である（唐沢 , 2018; Levy, 2009; 中川・安元 , 2019）。海外の高齢者ステレオタイプ研究において、SET は頻繁に扱われているものの（e.g., Chrisler, Barney, & Palatino, 2016; Fawsitt & Setti, 2017; Levy, Ferrucci,

Zonderman, Slade, Troncoso, & Resnick, 2016; Thielke, Sale, & Reid, 2012）、日本では数少ない文献（権藤・中川・石岡, 2017; 唐沢, 2018; 中川・安元, 2019）が触れるに留まっている。高齢者に対する否定的なステレオタイプが人々に内面化する過程を理解する上で SET は非常に有効であるにも関わらず、これまでに SET の理論的内容に着目し詳述した日本語の文献等は見当たらないため、本論文では、まず SET について概観することとする。そして、SET では十分な説明を提供できない実証的知見について指摘し、理論的補完を行うために必要な提案を示すことを目指す。

2. SET の概要

SET は大きく分けて、「内面化（internalization）」、「無意識下での活性化（unconscious operation）」、「自己関連性の獲得（salience gain from self-relevance）」、「自己への影響（utilization of multiple pathways）」という 4 つの過程から成る（Levy, 2009）。「内面化」とは、人々が生涯を通して様々な場面で高齢者ステレオタイプに触れ、自己に内面化していく過程である。高齢者に対する否定的なステレオタイプは広く一般的に存在し、幼少期の頃からそれらを内面化する過程が始まっているという（Levy & Banaji, 2002）。例えば、両親をはじめとする周囲の大人が、祖父母や地域の高齢者に接する時に見せる態度や言動が、幼少期の子どもによって自動的に内面化されると考えられる。

「無意識下での活性化」とは、上のように内面化されたステレオタイプが、人々の無意識下で自動的に、判断や行動に影響を与えるという過程である。内面化されたステレオタイプは、意図的に適用せずとも無意識のうちに活性化し、このことは、高齢者に対して否定的なステレオタイプのプライミングを用いた多くの実験によって示されている（Levy, 2009）。例えば Bargh, Chen, & Burrows（1996）では、高齢者プライミングと、大学生の参加者の歩行速度との関連を検討している。この実験では、プライミングを行った後に、参加者に気づかれぬよう歩行速度を測定した。その結果、ニュートラルなプライミングを受けた参加者よりも、高齢者プライミングを受けた参加者の方が、歩行速度が遅いことが示された（Bargh et al., 1996）。すなわち、高齢者プライミングを受けることで、動きが遅いという典型的な高齢者ステレオタイプが参加者の無意識下で活性化し、行動に影響したと考えられる。

「自己関連性の獲得」とは、内面化された高齢者ステレオタイプが、自己に関係のある事象として理解されるという過程である。生涯を通して内面化された高齢者ステレオタイプは、人々が若いうちは自己と関連のない事象として処理されるが、加齢に伴い、次第に自己との関連性を持つようになる（Greve, Rothermund, & Wentura, 2005）。そして、はるか遠い存在と認知していた高齢者という対象が、現在の自己の状態に重なる（Levy, 2009）。このような自己関連性の獲得のプロセスを、遅かれ早かれ誰もが経験するのである。

「自己への影響」とは、自己と結びついた高齢者ステレオタイプが心理的、行動的、生理的に自らに影響を及ぼすという過程である。心理的影響として、ネガティブな高齢者ステレオタイプを強く内面化している高齢者ほど、ストレスや孤独を感じやすく（McHugh, 2003）、自己効力感が低下し（Levy, Hausdorff, Hencke, & Wei, 2000）、精神的状態が悪化しやすい（Levy, Slade, & Kasl, 2002; Sargent-Cox, Anstey, & Luszcz, 2012; Wurm & Benyamini, 2014）といったものが挙げられる。行動的影響として、高齢者が否定的なステレオタイプを認知すると、様々な身体的、認知的課題の成績が低下することが知られている（e.g., Chasteen, Pichora-Fuller, Dupuis, Smith, & Singh, 2015; Levy & Leifheit-Limson, 2009）。例えば Chasteen らは、周囲からの否定的なステレオタイプを感じる度合いが強い高齢者ほど、記憶課題の成績が低いという結果を得ている（Chasteen, Bhattacharyya, Horhota, Tam, & Hasher, 2005）。生理的影響として、例えば Levy らは、ネガティブな高齢者ステレオタイプを抱くことが、血圧や心拍数などの悪化につながるという結果を得ている（Levy et al., 2000）。また、Levy, Slade, May, & Caracciolo（2006）は、ネガティブな高齢者ステレオタイプを保持する高齢者は、そうでない高齢者に比べて、急性心筋梗塞からの回復率が低いことを示している（Levy et al., 2006）。このように、内面化された高齢者ステレオタイプは、自己に対して様々な心理的、行動的、生理的な影響を及ぼすのである。

3. SET の不足点

以上で概観したように、SET は高齢者ステレオタイプが生涯を通して内面化し、自己に対して様々な影響を及ぼす過程について説明する理論である。一方で、高齢者が高齢者ステレオタイプに対する自己関連性を獲得する過程において、SET では十分な説明を提供できない点が存在する。以下では、その具体的内容について指摘し、SET の理論的補完を目指すこととする。

人々は一般に、高齢者である他者に関する判断を行う時、その高齢者が固有の特徴を持っている場合や、その高齢者に関する情報を得たいという動機づけの程度が高い場合に、高齢者カテゴリーに基づいた典型的かつ否定的なステレオタイプを付与しづらいことが示されている（e.g., Fiske, Neuberg, Beattie, & Milberg, 1987; Kite & Johnson, 1988; Neuberg & Fiske, 1987）。一方で高齢者が、高齢者である自己に関する判断を行う時はどうであろうか。これに関連して Zebrowitz（2003）は、人々は一般に、他者とは異なる自己の特徴について理解しており、判断を行う動機づけの程度も高いため、カテゴリーに基づいたステレオタイプの自己に対する適用を避けやすいと指摘している。よって高齢者が、高齢者である自己に対して高齢者ステレオタイプを適用することは少ないと考えられる（Zebrowitz, 2003）。このことについて、例えば、高齢者は実年齢よりも自分のことを若いと感じやすく、自分よりも若い高齢者が目指すべき人生目標を追求しやすいという結果が得られている（Heckhausen, 1997; Montepare & Lachman, 1989）。また、高齢者は周囲から

“elderly”というラベルを貼られることを拒み、自分を“senior citizens”や“retired persons”の一員であると捉えやすい（Montepare & Lachman, 1989）。高齢者は一般に、このような個別化（individuation）によって、自己と他の高齢者を切り離すと示唆されている（Zebrowitz, 2003）。

一方で、高齢者が自己に対して高齢者ステレオタイプを適用し、ステレオタイプ的な振る舞いをしてしまうという結果も、多くの研究で示されている（Levy, 2003）。例えば、高齢者に対して否定的な高齢者ステレオタイプを呈示した場合、「記憶力が低い」というステレオタイプが自己に対して適用され、記憶課題の成績が低下したという（Hess, Auman, Colcombe, & Rahhal, 2002）。また、高齢者にネガティブな高齢者ステレオタイプをプライミングし、彼らが書いた文字の若々しさについて若年層の参加者に評定させた Levy（2000）では、高齢者ステレオタイプをプライミングされた高齢者の文字は、そうでない高齢者の文字に比べて、より高齢者らしく震えていると評定されていた。また Swift, Lamont, & Abrams（2012）では、高齢者の握力について、「若年層の人々と比較するために行われる」と教示する群と、特に教示を与えない群を設けて、それぞれ測定している。その結果、若年層の人々と比較するための実験であると教示された群の方が、握力が低いという結果が得られた（Swift et al., 2012）。

以上のように、高齢者は個別化によって自己と他の高齢者を切り離そうとするにも関わらず、高齢者ステレオタイプを自己に対して適用し、その影響を受ける傾向がある。このような知見の不一致は、SET によって十分に説明することができない。SET では、高齢者は加齢に伴って高齢者ステレオタイプに対する自己関連性を獲得すると考えているが、その背景にあるメカニズムについて十分な説明が為されておらず、理論的補完が必要であろう。

SET において不足している以上のような点を補うためには、Tajfel（1981）の社会的アイデンティティ理論（Social Identity Theory; SIT）を援用することが有効であると考え、これについて以下で概観することとする。

4. SIT の概要

SIT は、人々は自分の所属する内集団にアイデンティティを帰属させ、内集団成員を肯定的に、外集団成員を否定的に捉えやすいという理論である（Tajfel, 1981）。この理論は、集団間ステレオタイプのメカニズムを説明するために、性別（e.g., Schmader, 2002; Swan & Wyer Jr, 1997）、人種（e.g., Mastro, Behm-Morawitz, & Kopacz, 2008; Van Laar, Levin, & Sinclair, 2008）、および障害者（Dirth & Branscombe, 2018）といった多様な文脈で用いられており、高齢者という対象においても有効である。上述のように、高齢者ステレオタイプに対する自己関連性を獲得する前の高齢者は、自己と他の高齢者を切り離す個別化を行う傾向があり、自己に対して高齢者ステレオタイプを適用することは少ないと言える。これについて、人々は内集団アイデンティティを自己のアイデンティティの一部として捉え、自己評価を維持しようとするため（Bodner, 2009）、高齢者は「より若い集団」にアイデンティティを帰属させ、周囲の高齢者を外集団と捉えることによって、個別化の方略を取っていると考えられる。実際に高齢者は、若作りやアンチエイジングによって、若い集団の一員としてのアイデンティティの獲得を望みやすいということが示されている（Kite & Wagner, 2002）。

5. SET の理論的補完

一方で、若い集団の一員としてのアイデンティティを希求する高齢者に対して、他の世代の人々はどのような反応をするであろうか。North & Fiske（2013）は、高齢者に対して「財産を蓄えず次の世代に引き継ぐべきである」、「必要以上に社会保障を受けるべきではない」、「無駄な若作りをせずに高齢者らしく振る舞うべきである」といった社会的要請から成る規範的ステレオタイプ（prescriptive stereotype）が広く一般的に見られると指摘している。このような規範的ステレオタイプに違反した高齢者に対して、周囲から否定的な反応が向けられやすく、世代間対立の大きな原因の 1 つとなっている（North & Fiske, 2016）。また、高齢者にとって、高齢者料金の適用や社会保障を受けるという経験、および若い家族や近所の人々から過度に丁寧な口調で話しかけられるといった対人的場面（e.g., baby talk; Caporael, Lukaszewski, & Culbertson, 1983）によって、自分が高齢者であることを改めて認識する機会が多いと考えられる（Levy, 2009）。さらに、高齢者はシワや背骨が曲がっているといった否定的な外見的特徴を持ちやすく（Langlois, Kalakanis, Rubenstein, Larson, Hallam, & Smoot, 2000）、自分が老化したという事実に気づかされることも多いだろう。

以上のように、他の世代からの社会的要請や、自分が高齢者であるということを再認識するような場面に直面することで、高齢者にとって、より若い集団にアイデンティティを帰属させ、自己と他の高齢者を切り離す個別化を行うのが困難になると考えられる。すなわち、高齢者において、他の高齢者との個別化を図りたいという欲求と、周囲からの社会的要請等との間で葛藤が生じるということである。その結果、高齢者ステレオタイプに対する自己関連性を獲得せざるを得なくなり、高齢者という社会集団にアイデンティティを帰属するようになると考えられる。そして、SET が想定する自己への心理的、行動的、生理的な影響を受けることになると示唆される。以上のように、SIT を援用することで、SET の理論的な不足点を補完することが可能になると考える。SET の概要および SIT による理論的補完についてまとめたものを図 1 に示す。

6. 今後の展望

本論文では、高齢者ステレオタイプの内面化や自己に対する影響を扱った SET について概観し、高齢者が高齢者ステレオタイプに対する自己関連性を獲得する過程に関する理論的な不足点を指摘した。そこで、SIT を援用することで、SET に対する理論的補完を行い、日本で十分

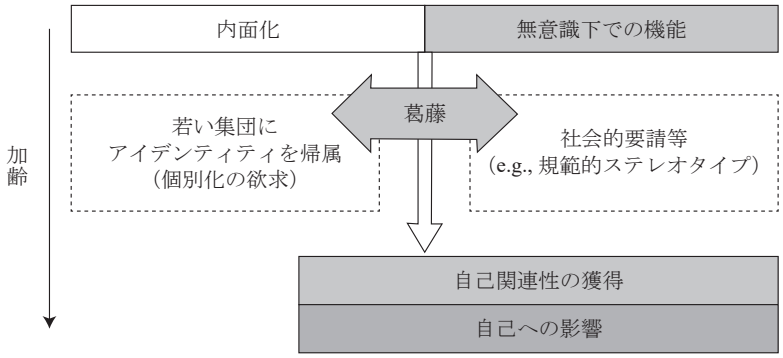

図 1：SET の概要および SIT による理論的補完

な検討が為されていなかった SET について、今後の研究方針の示唆を提示した。

しかし、以上のような理論的補完を行ってもなお、理論からの説明が困難な諸問題が、大きく分けて 2 つ残っている。第一に、高齢者が他の高齢者に対して高齢者ステレオタイプを適用する際の、自己関連性に対する影響である。他の高齢者に対して高齢者ステレオタイプを適用することで、若い集団に対するアイデンティティの帰属がより強化され、高齢者ステレオタイプの自己関連性の獲得が遅くなる可能性がある。一方で、高齢者ステレオタイプに対するアクセシビリティが高まり、自己関連性が獲得されやすくなるという逆の影響もあるかもしれない。このことから、他の高齢者に対して高齢者ステレオタイプを適用することがもたらす影響について、実証的知見と照らし合わせ、今後議論を加える必要があるだろう。第二に、SET における各過程と類似した現象との関連である。その一例として、被ステレオタイプ集団の成員がステレオタイプについて意識すると、それに合致したように振る舞ってしまうというステレオタイプ脅威（stereotype threat）が挙げられる。これは、黒人（Steele & Aronson, 1995）や女性（Spencer, Steele, & Quinn, 1999）といった被ステレオタイプ集団において頻繁に観察される現象であり、SET における「自己への影響」のうち、行動的影響と密接に関連していると考えられる。このように、SET の各過程とステレオタイプ脅威のような現象との関連や相違点について、今後整理していく必要があるだろう。

以上のような、今後実証的知見を得ながら検討を要する問題点は存在するが、本論文は高齢者ステレオタイプが高齢者自身に及ぼす悪影響を軽減するための研究に寄与すると考える。本論文で援用した SIT に基づけば、高齢者が自分より若い集団に対してアイデンティティを帰属し続け、個別化の方略を取ることができれば、高齢者ステレオタイプの自己関連性の獲得を抑えられ、SET が想定する心理的、行動的、生理的影響を受けづらくなると考えられる。このことから、例えば、高齢者に対する社会的要請から成る規範的ステレオタイプや、高齢者が「自分は高齢者である」と再認識するような機会を減少させることによって、個別化との葛藤を軽減することが有効であると示唆される。特に、高齢者に対して過度に丁寧な口調で話しかけるといった行為自体は悪意のあるものではないと言えるが、相手の高齢者アイデンティティを高め得るという点で、注意が必要であろう。以上のことから、SET に対して SIT を援用して理論的補完を行うという本論文の試みは、高齢者ステレオタイプが高齢者自身に対して及ぼす悪影響を軽減するための今後の研究において、有意義であると考えられる。

引用文献

Bargh, J. A., Chen, M., & Burrows, L. (1996). Automaticity of social behavior: Direct effects of trait construct and stereotype activation on action. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 230-244. https://doi.org/10.1037/0022-3514.71.2.230.

Bodner, E. (2009). On the origins of ageism among older and younger adults. *International Psychogeriatrics*, 21, 1003-1014. https://doi.org/10.1017/S104161020999055X.

Branaghan, R. J. & Gray, R. (2010). Nonconscious activation of an elderly stereotype and speed of driving. *Perceptual and Motor Skills*, 110, 580-592. https://doi.org/10.2466/pms.110.2.580-592.

Butler, R. N. (1969). Age-ism: Another form of bigotry. *The Gerontologist*, 9, 243-246. https://doi.org/10.1093/geront/9.4_Part_1.243.

Caporael, L. R., Lukaszewski, M. P., & Culbertson, G. H. (1983). Secondary baby talk: Judgments by institutionalized elderly and their caregivers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 746-754. https://doi.org/10.1037/0022-3514.44.4.746.

Chasteen, A. L., Bhattacharyya, S., Horhota, M., Tam, R., & Hasher, L. (2005). How feelings of stereotype threat influence older adults' memory performance. *Experimental Aging Research*, 31, 235-260. https://doi.org/10.1080/03610730590948177.

Chasteen, A. L., Pichora-Fuller, M. K., Dupuis, K., Smith, S., & Singh, G. (2015). Do negative views of aging influence memory and auditory performance through self-perceived abilities? *Psychology and Aging*, 30, 881-893. https://doi.

org/10.1037/a0039723.

Chrisler, J. C., Barney, A., & Palatino, B. (2016). Ageism can be hazardous to women's health: Ageism, sexism, and stereotypes of older women in the healthcare system. *Journal of Social Issues*, 72, 86-104. https://doi.org/10.1111/josi.12157.

Dirth, T. P. & Branscombe, N. R. (2018). The social identity approach to disability: Bridging disability studies and psychological science. *Psychological Bulletin*, 144, 1300-1324. https://doi.org/10.1037/bul0000156.

Fawsitt, F. & Setti, A. (2017). Extending the stereotype embodiment model: A targeted review. *Translational Issues in Psychological Science*, 3, 357-369. https://doi.org/10.1037/tps0000136.

Fiske, S. T., Neuberg, S. L., Beattie, A. E., & Milberg, S. J. (1987). Category-based and attribute-based reactions to others: Some informational conditions of stereotyping and individuating processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 23, 399-427. https://doi.org/10.1016/0022-1031(87)90038-2.

権藤恭之・中川威・石岡良子（2017）．老いと闘うか？老いと共生するか？―こころのアンチエイジングはありうるのか―．医学のあゆみ，261，668-672.

Greve, W, Rothermund, K, & Wentura, D. (Eds.). (2005). *The adaptive self*. Hogrefe and Huber.

原田謙・杉澤秀博・杉原陽子・山田嘉子・柴田博（2004）．日本語版 Fraboni エイジズム尺度（FSA）短縮版の作成―都市部の若年男性におけるエイジズムの測定―．老年社会科学，26，308-319.

Heckhausen, J. (1997). Developmental regulation across adulthood: Primary and secondary control of age-related changes. *Developmental Psychology*, 33, 176-187. https://doi.org/10.1037/0012-1649.33.1.176.

Hess, T. M., Auman, C., Colcombe, S. J., & Rahhal, T. A. (2002). The impact of stereotype threat on age differences in memory performance. *Journals of Gerontology: Series B*, 58, 3-11. https://doi.org/10.1093/geronb/58.1.P3.

石井国雄・田戸岡好香（2015）．感染症脅威が日本における高齢者偏見に及ぼす影響の検討．心理学研究，86，240-248．https://doi.org/10.4992/jjpsy.86.14020.

唐沢かおり（2018）．高齢者．北村英哉・唐沢穣（編）．偏見や差別はなぜ起こる？―心理メカニズムの解明と現象の分析―．（pp. 203-219）．ちとせプレス.

Kite, M. E. & Johnson, B. T. (1988). Attitudes toward older and younger adults: A meta-analysis. *Psychology and Aging*, 3, 233-244. https://doi.org/10.1037//0882-7974.3.3.233.

Kite, M. E., Stockdale, G. D., Whitley, B. E., & Johnson, B. T. (2005). Attitudes toward younger and older adults: An updated meta-analytic review. *Journal of Social Issues*, 61, 241-266. http://dx.doi.org/10.1111/j.1540-4560.2005.00404.x.

Kite, M. E. & Wagner, L. S. (2002). Attitudes toward older adults. In T. D. Nelson (ed.), *Ageism: Stereotyping and prejudice against older persons* (pp. 129-161). Cambridge, MA: MIT Press.

Langlois, J. H., Kalakanis, L., Rubenstein, A. J., Larson, A., Hallam, M., & Smoot, M. (2000). Maxims or myths of beauty? A meta-analytic and theoretical review. *Psychological Bulletin*, 126, 390-423. https://doi.org/10.1037//0033-2909.126.3.390.

Levy, B. R. (2000). Handwriting as a reflection of aging self-stereotypes. *Journal of Geriatric Psychiatry*, 33, 81-94.

Levy, B. R. (2003). Mind matters: Cognitive and physical effects of aging self-stereotypes. *Journals of Gerontology: Series B*, 58, 203-211. https://doi.org/10.1093/geronb/58.4.P203.

Levy, B. R. (2009). Stereotype embodiment: A psychosocial approach to aging. *Current Directions in Psychological Science*, 18, 332-336. https://doi.org/10.1111/j.1467-8721.2009.01662.x.

Levy, B. R. & Banaji, M. R. (2002). Implicit ageism. In T. D. Nelson (ed.), *Ageism: Stereotyping and prejudice against older persons* (pp. 49-76). Cambridge, MA: MIT Press.

Levy, B. R., Ferrucci, L., Zonderman, A. B., Slade, M. D., Troncoso, J., & Resnick, S. M. (2016). A culture-brain link: Negative age stereotypes predict Alzheimer's disease biomarkers. *Psychology and Aging*, 31, 82-88. https://doi.org/10.1037/pag0000062.

Levy, B. R., Hausdorff, J. M., Hencke, R., & Wei, J. Y. (2000). Reducing cardiovascular stress with positive self-stereotypes of aging. *Journals of Gerontology: Series B*, 55, 205-213. https://doi.org/10.1093/geronb/55.4.P205.

Levy, B. R. & Leifheit-Limson, E. (2009). The stereotype-matching effect: Greater influence on functioning when age stereotypes correspond to outcomes. *Psychology and Aging*, 24, 230-233. http://dx.doi.org/10.1037/a0014563.

Levy, B. R., Slade, M. D., & Kasl, S. V. (2002). Longitudinal benefit of positive self-perceptions of aging on functional health. *Journals of Gerontology: Series B*, 57, 409-417. https://doi.org/10.1093/geronb/57.5.P409.

Levy, B. R., Slade, M. D., May, J., & Caracciolo, E. A. (2006). Physical recovery after acute myocardial infarction: Positive age self-stereotypes as a resource. *The International Journal of Aging and Human Development*, 62, 285-301. https://doi.org/10.2190/EJK1-1Q0D-LHGE-7A35.

Macdonald, J. L. & Levy, S. R. (2016). Ageism in the workplace: The role of psychosocial factors in predicting job satisfaction, commitment, and engagement. *Journal of Social Issues*, 72, 169-190. https://doi.org/10.1111/josi.12161.

Mastro, D. E., Behm-Morawitz, E., & Kopacz, M. A. (2008). Exposure to television portrayals of Latinos: The implications of aversive racism and social identity theory. *Human Communication Research*, 34, 1-27. https://doi.org/10.1111/j.1468-2958.2007.00311.x.

McHugh, K. E. (2003). Three faces of ageism: Society, image, and place. *Ageing and Society*, 23, 165-185. https://doi.org/10.1017/S0144686X02001113.

Montepare, J. M. & Lachman, M. E. (1989). “You’re only as old as you feel”: Self-perceptions of age, fears of aging, and life satisfaction from adolescence to old age. *Psychology and Aging*, 4, 73-89. https://doi.org/10.1037/0882-7974.4.1.73.

中川威・安元佐織（2019）．加齢に対するポジティブなステレオタイプは高齢者において長寿を予測する．老年社会科学，41，270-277.

Neuberg, S. L. & Fiske, S. T. (1987). Motivational influences on impression formation: Outcome dependency, accuracy-driven attention, and individuating processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 431-444. https://doi.org/10.1037/0022-3514.53.3.431.

North, M. S. & Fiske, S. T. (2013). Act your (old) age: Prescriptive, ageist biases over succession, consumption, and identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 39, 720-734. https://doi.org/10.1177/0146167213480043.

North, M. S. & Fiske, S. T. (2016). Resource scarcity and prescriptive attitudes generate subtle, intergenerational older-worker exclusion. *Journal of Social Issues*, 72, 122-145. https://doi.org/10.1111/josi.12159.

朴蕙彬（2018）．日本のエイジズム研究における研究課題の検討―エイジズムの構造に着目して―．評論・社会科学，124，139-156．https://doi.org/10.14988/pa.2018.0000000004.

Sargent-Cox, K. A., Anstey, K. J., & Luszcz, M. A. (2012). The relationship between change in self-perceptions of aging and physical functioning in older adults. *Psychology and Aging*, 27, 750-760. https://doi.org/10.1037/a0027578.

Schmader, T. (2002). Gender identification moderates stereotype threat effects on women’s math performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 194-201. https://doi.org/10.1006/jesp.2001.1500.

総務省（2020）．人口推計．Retrieved from https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/gaiyou/pdf/1s1s.pdf（2021 年 1 月 20 日）.

Spencer, S. J., Steele, C. M., & Quinn, D. M. (1999). Stereotype threat and women’s math performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 35, 4-28. https://doi.org/10.1006/jesp.1998.1373.

Steele, C. M. & Aronson, J. (1995). Stereotype threat and the intellectual test performance of African Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 797-811. https://doi.org/10.1037/0022-3514.69.5.797.

Swan, S. & Wyer Jr, R. S. (1997). Gender stereotypes and social identity: How being in the minority affects judgments of self and others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 1265-1276. https://doi.org/10.1177/01461672972312004.

Swift, H. J., Lamont, R. A., & Abrams, D. (2012). Are they half as strong as they used to be?: An experiment testing whether age-related social comparisons impair older people’s hand grip strength and persistence. *BMJ Open*, 2, e001064. https://doi.org/10.1136/bmjopen-2012-001064.

Tajfel, H. (1981). *Human groups and social categories: Studies in social psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Thielke, S., Sale, J., & Reid, M. C. (2012). Aging: Are these 4 pain myths complicating care? *The Journal of Family Practice*, 61, 666-670.

Van Laar, C., Levin, S., & Sinclair, S. (2008). Social identity and personal identity stereotype threat: The case of affirmative action. *Basic and Applied Social Psychology*, 30, 295-310. https://doi.org/10.1080/01973530802502200.

Vitman, A., Iecovich, E., & Alfasi, N. (2014). Ageism and social integration of older adults in their neighborhoods in Israel. *The Gerontologist*, 54, 177-189. https://doi.org/10.1093/geront/gnt008.

Wurm, S. & Benyamini, Y. (2014). Optimism buffers the detrimental effect of negative self-perceptions of ageing on physical and mental health. *Psychology and Health*, 29, 832-848. https://doi.org/10.1080/08870446.2014.891737.

Zebrowitz, L. A. (2003). Aging stereotypes: Internalization or inoculation?: A commentary. *Journals of Gerontology: Series B*, 58, 214-215. https://doi.org/10.1093/geronb/58.4.P214.

（受稿：2021 年 1 月 5 日　受理：2021 年 1 月 25 日）